



発 明 馬 鹿

企業紹介

三 浦 貢*

人のやらない技術をやり、他社で作れない製品だけ売るのが信条とする馬鹿野郎がいる。

それが三浦貢であり、ミウラ化学装置㈱である。

規格品をマスプロするのが金儲けの原則なのに、次から次へと多額の研究費を費い新技術開発に没頭し、その企業化がヘタクソなのは銭失ないの原則である。銭失ないの経営を固執するのは馬鹿であるが、馬鹿は死ななきやなおらない。

その歴史を列記してみよう。

1) 戦争中の想出

ガソリンがなければ上陸用ゴム舟艇が作れない、アセトンがなければ電線が作れない、アルコールがなければ火薬が作れない。

この戦時物質不足の折、活性炭吸着の溶剤回収装置を作ったら、売れるわ売れるわ。他社に技術がないから市場を独占した。

シリカゲル吸着による空気脱湿の技術を開発したら、超高空飛行の操縦士呼吸の酸素ボンベ吸引管の凍結防止、発射圧一定化の魚雷命中率向上、鋳巣防止の品質改良、送入空気脱湿による溶鉱炉製鉄率向上等多くの用途があり、独占的に生産して儲かる。

この時の「新技術さえ開発すれば儲かる…」との錯覚が今日まで続いたとも言える。

2) 珪藻土ブリコートフィルター

終戦後、珪藻土濾膜による精密濾過機を始め。今こそ猫も杓子も珪藻土濾過機を作っているが、30年前はミウラのウルトラとして独占。

3) A I フィルター

アメリカの Judson Brown 発明の原理を共同開発したのが A I フィルター。

高精度で安いので、水泳プール、工業用水濾

過に 6,000 台独占。

4) 騒音防止機

15年前技術士会からアメリカ技術士の活動状況調査に渡米。

日本にない技術を導入したいと調査し鎗玉に上ったのが、騒音防止。

大阪大学教授と東京大学教授に相談したら、楽器の音質改良なら売れるが、工場騒音防止機は誰も買わないから止めておけとの忠告。

他もやらないことを俺がやるとて、合弁会社バージェス・ミウラ消音工業㈱を設立し、数年後にはブームにのる。

5) Guva Tower Press.

A I フィルターのライセンスを得たスイス会社が発明した泥漿圧搾濾過機。

心臓強い私に「ナルホド、ハハーン」と感服させた新技術。

6) スクラバ青い鳥とトーテムポール

大阪市工研の成田功君から、「面白い集塵機の研究が出来たから、ミウラで企業化してみないか」と誘われる。

「濾過機屋のオヤジの私に、専門違いの集塵がわかるものか」「A社、B社等大会社と交渉したが、いつまで待ってもやるのかやらないのか態度が不明で困っている。即断即決のミウラでやってくれないか」との誘いが、濾過から集塵に、さらに悪臭、排水へと範囲を拡げるキッカケとなる。

数百万円のテスト機を作り、住友金属の好意で電気集塵後の排ガスのテスト。性能は良かったが運転経費が高いことがわかり、企業化を放棄する。

「専門外の集塵とは絶体縁を切る、金輪際やるものか」と決心したが、1週間もすると、「なにかよいアイデアがないか」と、飛行機の中でも麻雀をしながらも考えに考えぬく。

* 三浦 貢 (Mitsugi MIURA), ミウラ化学装置株式会社, 社長

その結果生れたのが、「青い鳥」であり「トーマスボール」

Multi-stage Multiple Venturi Scrubber であり、世界一の高性能と盲信している。

製作台数 700 台、Monroe Environmental Corp. にも技術輸出され、U.S. Steel や Ford 社にも採用されている。

7) スクラバ SKI.

Venturi Scrubbing を数回連続して行わせた、大容積ガス処理用のスクラバ。

8) 青い鳥 ELECTRO

電気集塵機と青い鳥を組合せた構造で、微粉塵除去と有毒ガス除去が、1 台で同時に達成出来る。

9) セミドライ法

昭和電工発明をミウラが企業化している。

1,000 ppm の濃厚ガスを 99% 除去するのは容易であるが、99% 除去した後の 10 ppm を 80% 除去するのは難しい。

5 ppm の超稀薄ガスを 99% 除去し得るのがセミドライ法。

10) 濡れ網脱臭

NaOH, H₂SO₄, NaClO 等の数種類の液で濡れた網目を、悪臭ガスを直列に通過させて、悪臭全成分を安い設備費で除去する。

11) 菊花バッグフィルター

フィルターバッグの数を 1/2 にする。

12) 半値シクナー

汙過と大気汚染に多数の新技术を發明して、ネタが少なくなり、新分野を求めたのが排水処理で、その一番打者が半値シクナー。

従来の凝集沈澱では水が上昇流しフロックが沈降する原理だ。

水の上昇がフロックの沈降を妨害するので、上昇速度を最低にとるので、処理時間が 1 時間もかかる。

水の上昇をなくし、傾斜板間を水を水平流させ、フロックを傾斜板面に沈降させた後落下させることにより、処理時間を 5 分間に短縮。

第 1 号機を大胆に日本合成ゴムの 1,000 T/H の超大シクナーに適用し、床面積 1/2 となる。

その後弯曲の欠点があったステンレス傾斜板を、下部に錘りをつけたフィルムにし、安くて

安全平行を保つことに成功。

13) 2 秒分離機

排水中の S S 分離を 5 分間に短縮したことに満足せず、2 秒間に短縮することに成功。

排水中にマグネタイト粉を混じり、S S とマグネタイト粉の共凝集フロックを作り、永久磁石で磁着分離する原理。

半値シクナーと 2 秒分離機はデンバー市の 1977 年のアメリカ化学工学会で発表。

14) 霞ケ関 BOD

排水処理は水に溶けていない S S 分離と水の溶けている BOD 除去の組合せである。

前者に新技术を開発したら後者の新技术の發明に迫られる。BOD 除去の最高技術は回転円板法だと言われている。それよりも安く速く出来る方法がないものかと、編み出したのが霞ケ関 BOD。

BOD は酸素を吸った菌が溶存 BOD を喰べる理論だから、菌数が多い程効率がよいのは当然だ。化学処理した醗酵性オガ屑層に酸素を吸わせた排水を通過させる。

莫大な表面積に付着した菌が BOD を喰べる。1 万人の警官が犯人を捕える従来法と比較して、この方法は 100 万人の警官がいるから高効率。

15) コレデモカ BOD

オガ屑と菌を含む水に気泡を加え、コレデモカコレデモカと三者の接触効率を図ったのが、コレデモカ BOD。

16) 溶剤回収 GASTAK.

東洋紡績呉羽化学がビーズ状活性炭で連続向流吸着及び脱着装置を開発し、ミウラにライセンス。

吸着溶剤の脱着には水蒸気を作用するから、脱着溶剤は多量の水を含み、蒸溜機が必要。

特殊技術を加えた窒素ガス脱着法を採用し、完全無水の脱着溶剤を回収し得た。

17) プロペラノズルとプロペラミキサー

汚水をノズルから噴霧すると、ノズルがすぐつまる。ノズル内の水を自動的に旋回させ、その旋回流で翼を回転させると、10 ヶ月連続使用しても一切つまらない。

このプロペラを管内に設けたのがプロペラミ

キサーで、既存のスタチックミキサーより高性能だ。

おわりに

新技術の発明開発は面白い、楽しい、私は大好きだ、いや私の生命かもしれない。

人間には嘘があるが、技術には嘘がない。

政治にはかけひきがあるが、技術にかけひきがない。

これが出来ないかと夢を描く。あれも出来ないかと執念で追いかける。

特許庁の話では、出願人の半数以上は大学の技術教育を受けていない者だと。

大学出の技術者は、10の組合せの中の1が悪ければ、あれはこうだ、これはああだと批判ばかりする。せっかく持っている知識を批判と拒絶に使用するが、創造には使用しない。

一方大学を出ていない技術者は、僅かな基礎知識を基にして、これが出来ないかと夢を描き、10の組合せの中で1が良ければ、さらにそれを延ばそうと野心を抱く。

それが発明につながり、自信が生まれるだけでなく、知識が増し、さらに次の発明をする。

本で習った知識と身体で体験した知識との差だ。私が大学出の者はロクな奴がいないと毒舌を吐くと、「三浦よ、オマエも東大を出ているじゃないか」と責めるから「俺が出たのは東大でなく、潮岬燈台だよ」といなす。

私の特許権は日本特許百数十件、外国特許拾

数件あるが、勘定するのが面倒くさい。

しかし発明と儲けはつながったり、つながらなかったり。

発明の仕上げ技術と勇敢な売込みが必要だ。大会社ほど、知識ある技術者ほど、実績のない製品を買いたがらない。

考えてみると、新発明に実績がある筈がない。

企業化に「場所を貸してくれ、この技術をテストさせてくれ、銭は要らない、もし成功したら実費だけ払ってくれ」とユーザーの諒解を得たものは、殆んど全部銭儲けにつながる。

「青い鳥」が700台、「2秒分離機」が100台、AIフィルターは10年以上連続で年間4億円の売上業績を誇っている。

知識が無くてもよいから、勇敢に断行する仕上技術者を、もっと欲しい。

知識が無くてもよいから、勇敢にユーザーを説得する営業マンを、もっと欲しい。

発明を追いかけて70才のオヂイチャンになった。技術開発を買われて日本技術士会々長に祭りあげられて糞忙しい。

公害防止では飯が喰えなくなりつつあるので、永久に不況のない上水道下水道の新技術発明に突入したい。

70才のオヂイがいい加減に隠居したらよいのに、この調子では地獄へ行っても、三途の川の浄化技術を発明することだろう。